

ここすき！特別企画 幼稚園に行ってきました！

国立ふたば幼稚園 訪問インタビュー

国立ふたば幼稚園は目黒にある柿の木幼稚園の国立分園として、昭和 40 年に開園しました。西地区の住宅が並ぶ一角にあります。



教育目標

国立ふたば幼稚園の保育では、毎日の集団生活の中で自立の精神と、基本的習慣を養い、他者を思いやる心、社会性の芽生えを培うと同時にひとりひとりの個性を尊重し、豊かな人間形成の基礎作りを心がけています。

集団生活の中での「あそび」を通して、好奇心や探究心、自立心を身につけ、子どもがのびのびと成長していくために全力を注いでいます。

園のここが自慢というのは？

この問いにはユーモアを交えながら、控え目に話されていましたが、畑の話になると一変。園の専用農園があり、園長先生自ら取り組んでいるそうで、土に触れ、さつまいも、じゃがいもの収穫を親子で楽しめます。また、春には田植え、秋には稲刈りを体験し、収穫したもち米でお餅つきをします。親子で土にふれあい、自然に体験できるいい機会になっています。以前は農園通信等も発行するほどで、子どもたちのために先生の一生懸命さが伝わってきました。

園バスも自ら運転し「今日は天気いいね」「多摩川まで行こう」と思いたったらお弁当と大きいやかんを積んで出かけることもありました。とお話されていました。

大切にしていること

日ごろから子どもに対しては、日常の中での「気づき」が重要であると考え、大人が子ども達の中に入って一緒に過ごす生活の中で子どもの心の動きを感じたり、友だちをいたわる心の育ちを見つけたりすることの大切さを伝えているそうです。

園長先生が感激したことは、子どもたちに励まされたことです。園長先生のお子さんがまだ幼いころ入院することになりました。まだ小さかったので、付添いが必要でした。夫婦で交代しながら、日中業務と夜間の付添いを行っていましたが、日々の疲労が積み重なってきていました。その様子を察してか幼稚園の子どもたちが「先生、大丈夫？」となぐさめの言葉をかけてくれたそうです。園長先生はこの時のことをふりかえりながら、「子どもを持って親になり、子どもによって親として成長できました。また、園の子どもたちから園長にしてもらいました」と話していました。

若い職員には人材育成としての言葉がけとして、「肩肘張らず、まじめに接すれば子どもが先生にしてくれる。」と伝えています。また、日々、生活している子どもたちから見えてくるものに気づくことの大切さも併せて話されているそうです。



入園してくる保護者には、幼稚園は教育機関という意識があるようで、勉強などを教えこんで欲しいという要望を受けることがあるそうです。確かに幼児期に教え込めば何でもできますが、この園では、つめ込む時期とはとらえずに、これからたくさんのかたちを吸収していくための「引き出し」の数を増やす時期であると考えています。子どもたちを型にはめたくないと考えていて、「子どもが生活していくための力として協調性を大切にしたい。自分とは違う人を排除せず、他者を思いやり、自分がされていやなことは人にはせず、物事を置き換えて考えることができるゆとりが出ると、良いですね」と話されていました。

小澤園長先生は大学卒業後、外資系の会社に勤務。利潤の追求、効率化を求められ、残業の毎日を送っていたそうです。幼稚園と全く違う価値基準での仕事でした。ただし、園長先生は、当時と今とが180度違うという捉え方をせず自分の過ごしてきた今までのものと、その中の光の当たるところが違っていると考えているそうです。

幼稚園の園長という仕事の輝きは、会社勤務していた経験からもたらされています。

ふたば幼稚園では早朝・長期休みを含む預かり保育の充実といった新しいことにも取り組んでいます。

昨今の子育てについて感じていることの質問には、「伝統もありますが、うつり変わりもあります。必要とされるものは残り、必要のないものは去っていくように新陳代謝はあるものです。」と話されていました。



卒園記念品として贈られた鳥小屋



四季をしっかりと感じられる園庭

飲料水にもこだわり、浄水器が設置されていました。専任講師による制作、体育指導も実施しています。「子どもまつり」などは保護者が自主的に活動され、たいへん好評だったそうです。

インタビュー全体を通じて、おだやかでありながら、大切にしてきた考えを誠実にお話しされている姿が印象的でした。そんな先生の姿に触発され未来を担う子ども達への期待と大人としての責任をあらためて強く感じる時間でした。

※幼稚園のホームページは市役所ホームページからもご覧になれます。

国立市ホームページ→子育て支援ページ→子どもを預ける→幼稚園→国立市幼稚園等一覧